別記様式第５号（第 15 条関係，第 23 条関係）

論文審査の結果の要旨

報告番号	博（経）甲第　18　号	氏　名	田中　史王
学位審査委員	主査　徐　陽　印 副査　式見雅代　印 副査　林　徹　印		

題名：企業成長の過程　－企業家の人脈と成長を中心に－

論文審査の結果の要旨：

本論文は次のように構成されている。

序　章　緒言
第１章　理論的考察
第２章　箕面有馬電気軌道の多角化　― 小林一三の企業家的活動の変容 ―
第３章　小林一三を巡る企業家人脈と企業家活動の発展機会
第４章　実務事例による検証 ― 筆者の実務経験を題材として ―
終　章　本研究の結論と今後の研究課題
Appendix　明治末期・大正期の関西私鉄の概要について

序章では、企業成長における「経営者の人間性」の位置と意味を明らかにするために、既存の研究手法への批判的視座を示したうえで、本研究の方法を提示している。

第１章では、関連する学説を概観し、Homans の所説を基に鍵概念となる「企業家活動」、「企業家（企業家資質）」、「企業家人脈」から成る分析枠組みを措定し、そこに「相互作用」と「変容」の動的視点を加えることで、本研究の視角を提示している。第２章では、その枠組みによって箕有電軌の多角的事業展開を分析・検討し、従来の研究では必ずしも十全に説明されてこなかった「小林の企業家活動及び多角的事業の展開における複数の節目」を抽出し、それらに基づいて企業成長のダイナミズムを説明している。第３章では、中上川彦次郎と岩下清周を中心に形成された小林の企業家人脈を析出し、人脈内の相互作用を通じて小林の人生観（企業家資質）が変容していった過程において、小林の企業家活動、資質、人脈、これらの関係を具体的に明らかにしている。そのうえで、分析枠組みを通じた理論的説明を行っている。第４章では、本研究の分析枠組みの有効性と妥当性を論証するために、著者の実務経験を事例として取り上げ、あてはめを行い、考察を行っている。

終章では、事例分析の結果をふまえて本研究を総括している。さらに、本研究の学術的な

貢献と経験的な意義を著者なりに示し、残された研究課題を展望している。

Appendix では、箕有電軌と同時期に近畿圏で企業成長・発展を遂げた競合会社について概観し、マクロ経済環境の影響（景気の動向）や各社の企業成長・発展の経緯やその特徴を整理している。これにより、各社の企業成長・発展はマクロ経済環境の影響だけではなく独自の成長・発展の契機を有していることが把握されている。

本論文は、小林の企業家活動をめぐって、「経営者の人間性」を捨象している伝統的な経済学的アプローチや、一部の歴史家による小林への過度ともいえる英雄視観が主流であったのに対し、「大正初期までの【模索的・挑戦的な展開】」と「大正後期以降の【実験/研究的・慎重的な展開】」、すなわち小林の事業に対する 2 つの異なる姿勢を、その時期区分とともに抽出し、人脈内部の他の企業家たちとの相互作用のなかで、前者から後者へと変容するメカニズムを解明している点に、新規性を認めることができる。なお、本研究は競争的研究費「企業家研究フォーラム」2011 年第 9 回研究助成による成果の一部でもある。また、本論文は、小林の企業家活動ないしその資質の変容に対して、集団行動理論を基礎として構築された著者独自の分析枠組みを通じて理論的な説明を与えた点に、独創性を認めることができる。これにより「経営者の人間的側面（企業家資質）」が浮き彫りとなっていることから、学術的貢献も認めることができる。そのような手法は、従来の小林に関する先行研究にみられず、独創的なものと評価できる。さらに、本論文は、企業家活動における挫折や困難を乗り越える過程において、小林の事業に対する姿勢が他の企業家たちとの人脈のなかで非直線的かつ断続的に変化していくそのありさまを記述・説明することにより、英雄視観に対する代替的な枠組みを示している点で独創性がある。本研究独自の分析枠組みを、実務家としての著者が経験した事例にあてはめて、その分析を試みている点で、論証可能性が認められ、トップ・マネジメントとしての著者の経験を事例として取り上げ、理論的に分析している点は、本専攻の DBA プログラムの趣旨と合致する。一方、構成、注釈及び文献引用の形式などについては、概ね完成の状態にある。しかし、一部の図や表は改善の余地も認められる。

以上より、本論文は、本研究科の「博士学位論文の審査基準」（独創性、新規性、貢献度、論証可能性、完成度）を満たすものと判断され、本学位審査委員会は全員一致で博士（経営学）に値するものと判断する。